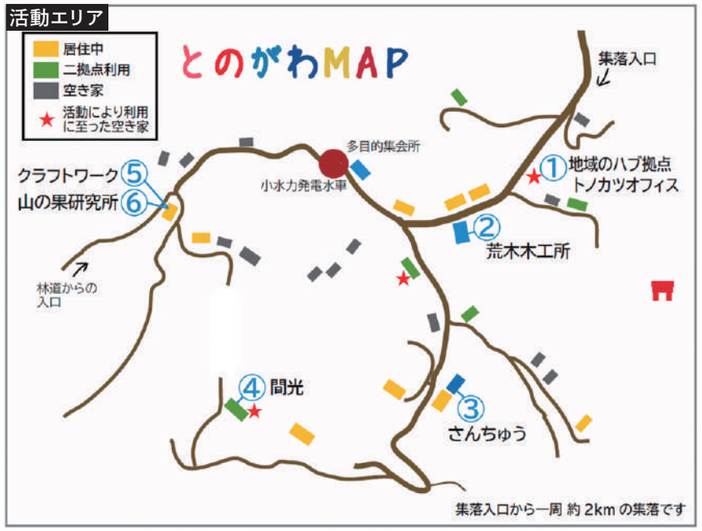
住まい活動助成

殿川の活性化に取り組もう会

奈良県吉野町

限界集落の空き民家を地域の活動交流拠点に高める活動

集落内の空き家を整備した拠点に集まる「トノカツ」メンバー



奈良県のほぼ中央部に位置する吉野町は、面積の8割以上を山林が占める中山間の町。殿川集落はその東端にある。地域おこし協力隊経験者の定住などをきっかけに、集落活性化への取り組みが本格化している

団体設立経緯

殿川の活性化に取り組もう会（トノカツ）は、集落住民と移住者の約10名で運営する団体です。2014年に移住者夫婦が転入してから大学生の地域活動を受け入れるようになり、中断していた夏祭りを復活させたり、集落で昔栽培されたというリンゴを植樹したりと、集落の活性化に取り組んできました。それに合わせて移住者も増えはじめ、活動への協力者が増えてきたことから、17年に団体を立ち上げるに至りました。

活動概要と対象範囲、活動に至った背景

奈良県吉野郡吉野町の東端に位置する殿川集落は、1947年（昭和22年）に開村した戦後開拓村です。標高約500mの地域に49戸が入植しましたが、現在は9戸まで減少しています。第1世代の入植者は大半が亡くなり、第2世代は市街地へと転出し、集落の役割を終えつつありました。

しかし、2014年に移住者が転入して当団体の前身となる活動を開始したのをきっかけに、空き家を利用する動きが生まれました。すでに居住している9世帯・11名に加えて、5世帯・10名が、2拠点利用をする状況へと変化していきました。さらに、19年から続く新型コロナウイルス禍をきっかけに、移住者と先住者との交流が深まり、お互いの活動を応援して協力し合う気運が高まりました。

そこで、これらの住民の活動を連携して集約する「**活動交流拠点**」を立ち上げて、集落全体の魅力を発信したいと考えました。本団体は、それぞれユニークな生業を持ち、活動するメンバーで構成されています。交流拠点を中心としてメンバーの活動を発信することで地域の魅力をPRし、関係人口の増加や、さらなる移住者や2拠点利用の増加へとつなげていきたいと考えました。

活動内容と成果

1.空き家を利用して「地域のハブ拠点」をつくる

1-1.空き家の利用交渉、清掃

殿川集落の1軒の空き家の利用を交渉し、賃貸契約を締結しました。所有者の同意の下、不用品の処分や清掃、補修、そして敷地内と畑の除草作業を実施しました。集落の入り口に建つ家屋であるため住民にも活動をしていることが認識されやすく、高齢住民が様子を見に立ち寄るなど、取り組み内容について知ってもらう機会になりました。

1-2.活動交流拠点「トノカツオフィス」の整備

借り上げた空き家を、**地域交流拠点「トノカツオフィス」**と定め、活動できるように建物を整備しました。玄関と縁側の塗装を塗りなおしたり、台所の壁や通路に珪藻土を塗ったり、大型倉庫の屋根を塗り直したりしました。この作業には、吉野町への移住案内の窓口を務める「吉野町関係案内人」や、株式会社SAGOJOが運営する泊まれるシェアオフィス「TENJIKU吉野」などの協力を得て、関東や九州からの来訪者が参加しました。

1-3.案内看板の設置

殿川は集落の入り口が分かりづらく、来訪者が道に迷うことが多々ありました。特に集落まで1.5kmの山深い林道を通る際は、案内がなく不安だ、という意見をよく耳にしていました。

そこで、運営メンバーの木工所から提供を受けた吉野スギ材を活用し、看板を自作して7カ所に設置しました。「明るい青色が分かりやすい」、「人の暮らしの気配が感じられる」と好評です。さらに住民からは、「日常生活でも来訪者に案内しやすくなった、設置してくれてよかった」との感想が寄せられました。

1-4.住民の活動を発信するPRイベントの実施

①フリーマーケット&フードイベント

22年5月5日、殿川集落内で山椒とジビエの加工を手掛ける作業場「さんちゅう」で、イベントを開催

集落の入り口に建つ空き家を借り受けて不用品を処分。拠点として使えるように整備した

拠点の整備には、関東地方や九州地方からの来訪者も参加。台所の壁や倉庫の屋根の塗装作業に活躍した

吉野スギ材を使って集落まで道案内する看板を製作、設置した

様々なイベントを開催して来訪者を増やし、集落生活の魅力を伝える
A. 5月5日の子どもの日に開催したイベントでは、バームクーヘンを手作り
B. 8月のイベントでは木工ワークショップなどを提供
C. 太陽光発電や小水力発電など、エネルギーの地産地消の取り組みも発信

しました。子ども向けにバームクーヘンを作ったり、手作りピザや殿川集落の特産の山椒を使ったクラフトコーラを販売したり、フリーマーケットなどで交流したりしました。参加者は約40名。吉野町在住の外国籍の人たちも参加しました。

本イベントでは、団体メンバーの活動をPRしながら、来場者の属性の傾向を調べました。また、来場者の動線確認、危険な場所の把握、駐車場の設置など、集落でイベントを開催する際の注意点について話し合いました。

②「とのがわの自然をまるごと体験」イベント

8月6日・7日、**「とのがわの自然をまるごと体験」**イベントを開催しました。県下の全小学生に配布される『奈良県山の日・川の日イベントガイドブック』（発行：奈良県）に情報を掲載して、殿川集落を広く周知しました。本ガイドブックに掲載されたQRコードおよびSNS経由の当団体ホームページアクセス数は、1カ月間で900PVを超えました。奈良市内を中心に、奈良県内および県外からもアクセスがあり、当地を周知することができました。

当日は地区内5カ所で、木工、山椒摘み、和紙小物作り、ラジオ作り、ドラムワークショップなどの各企画を実施、飲食も提供しました。トノカツオフィスでは建物内と外で、複数のワークショップを開催しました。本イベントの予約数は60名を超えましたが、新型コロナ第7波のピークと重なって直前キャンセルが相次ぎました。最終的な来場数は小・中学生が13名、20代から50代が15名、60代以上が11名となりました。

参加者が減りこそはしましたが、若手住民が団体メンバーに新規加入したり、村外へ転出した元住民が来訪したり、東京からの来訪者がスタッフとして飛び入り参加したりと、とても活気あるイベントとなりました。年長の運営メンバーからは、このイベントを毎年継続したいという意見が出るなど、実り多いイベントとなりました。

2.限界集落発の「インフラフリーな暮らし」の魅力発信

「限界集落」という言葉には、一般的に負のイメージが付きまといますが、16年に大学生が実施した殿川集落の全戸調査では、住民は集落の生活に満足しているという結果が出ています。当地では、数年に一度、雪害によって停電が発生します。上水道はなく井戸水を使っているため、汲み上げる電力の確保は必須です。このような土地柄であるため、住民は災害の備えに強く、お互いを助け合う人間関係がおのずと形成されています。野菜を自給し、熱源を森林バイオマスから得る、狩猟をして肉を確保できる人もいます。

コロナ禍や気象災害の増加をきっかけに、人々の間にこれまでの生活や価値観を見直す動きが出てきています。このような世情において、限界集落の“幸福観”を発信することは、集落の強みとなるかもしれません。そこで本事業では、トノカツオフィスにおいて、自然エネルギーを活用した集落の取り組みを紹介することにしました。

2-1.「インフラフリーな暮らし」を体感できる場所の整備

トノカツオフィスに太陽光パネルを設置して、そのエネルギーで建物内の電気を賄うシステムをつくりました。工事は団体メンバーの電気工事士が担当しました。電線は外の大型倉庫につなぎ、オフィス建物に送電する仕組みになっています。殿川集落では、雪害や災害発生時に弱点となる電力供給が大きな課題であり、独立したシステムをつくることを目指しました。

2-2.自然エネルギー利用について考えるワークショップの開催

12月11日、トノカツオフィスにおいて「**電気自給ワークショップとソーラー影絵**」というイベントを開催しました。太陽光パネルと蓄電の仕組みを座学で学び、ワークショップ形式で簡易な太陽光システムを組み立てました。その後は、集落内の小水力発電を見学しました。参加数は30代から60代の大人が36名、子どもが4名の約40名。全般に関心は高く、質問が途切れず、実際に導入したいという声が多く上がりました。小水力発電についても同様で、当地がなぜこのような取り組みを進めているかについて、理解を広げる好機となりました。

昼食には、殿川特産の山椒を使用したお弁当を提供し食材を販売。食の面からも、地域の取り組みをPRしました。さらに、創作影絵作家チーム「hoshifune」が太陽光パネルのエネルギーを蓄電した電気を使って、アートパフォーマンスを披露しました。本イベントの主旨に共感して制作された、電気をテーマにした新作です。ワークショップでの学びもあり、蓄電した電力を実際に使うことについて参加者の理解は深まったようでした。

イベント終了後は、自分たちの住む地域でもワークショップを開催してほしい、などの依頼が寄せられ、コアなファン層を獲得できたと感じました。なお、本イベントの様子は、近鉄系列のケーブルテレビ局「コミュニティビジョン吉野」で放映されました。

2-3.移住体験ツアーの受け入れ

12月9日・10日に吉野町移住対策協議会が主催する「そこが知りたい！ 住んでよしのナビツアー」を受け入れました。団体メンバーからは、殿川集落の暮らしについて説明しました。

移住希望者には、町内の住宅密集地を希望する人もあれば、殿川集落のような小さい集落を希望する人もおり、空き家バンクには様々な希望が寄せられます。町内でも精力的に活動している集落のグループが集まり、移住対策協議会を立ち上げました。1000人規模の町内集落2団体と、われわれ10人規模の殿川1団体とが、協力して活動しています。

殿川は「山の上のポツンと一軒家」を好むような層をターゲットとしています。近年は実際に集落への移住者が増えている状況から、行政からも関心を寄せられる地域となりつつあります。

課題と解決方策

本事業の目標は100%達成しました。当団体は立ち上げ期にあり、活動拠点「トノカツオフィス」を新設し、各メンバーの連携を強化できたことは、大きな成果でした。さらに、新規メンバー加入や、高齢住民が積極的になるなど、住民の意欲が高まりました。東京から定期的に訪問するファンも数名現れ、自然エネルギーイベントにもファンができました。また奈良県事業に参加したことや、吉野町が連携する移住対策協議会に加入して、行政から当地の取り組みに関心をもってもらうようになりました。

一方で、当団体のメンバーは現役世代が多く、活動と生業との両立が難しくなる場面がしばしばありました。これに対して、作業を簡素化したり、新規メンバーを募ったりしたほか、移住対策協議会や吉野町関係案内人、TENJIKU吉野に協力を仰ぎました。しかしながら、核となって動くメンバーの負担軽減は課題です。負担の大きいものについては、たとえ少額でも人件費を賄っていく必要性を感じます。今後はそれらの人件費を必要経費に含めて、各種事業の収益を考えていくことが必要と考えます。

今後の予定

自然エネルギーワークショップを殿川集落と集落外で開催します。各種の生活インフラを住民自らがコントロールできるという強みをPRして、暮らし方に共感するファンをさらに増やします。

また、研究者や芸術家、林業家といった団体メンバーの専門性を活かして、それぞれのファン層を獲得し、関係人口の増加を目指します。具体的には、農業やジビエ加工の体験、自然科学系イベントの開催、「奈良・町家の芸術祭はならぁと」への参加を予定しています。

殿川の活性化に取り組もう会

2017年1月設立／メンバー数：10人／代表者：水内 義人（みずうち・よしひと）
●〒639-3322　奈良県吉野郡吉野町小名1401 トノカツオフィス
tonokatsu.yoshino@gmail.com　tonokatsuyoshino.wixsite.com/event1/
www.facebook.com/soratoto.tonogawa/

過疎化の進む吉野・殿川集落の住民それぞれが、物ごとを主体的に考え互いの意見を尊重、各自の生活や活動をお互いに応援、協力し合いながら、集落を存続させていくことを目指しています。